

小學讀本

卷之二

T 1A1

10

Ta 84

師範學校編纂

小學讀本

明治七年  
六月改正

文部省刊

圖書 和圖書 逆



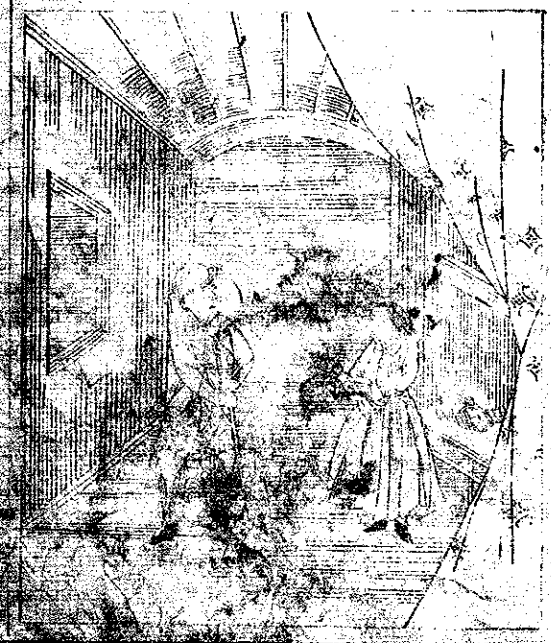
a 1 3 8 0 3 2 1 2 0 0 a

福岡教育大学蔵書

小學讀本卷之三

第一

此女兒ハ人形ヲ持テ  
ク○汝も人形ヲ好む  
ハ○我も其ニ好  
ム○此男兒も人形  
ヲ持テクヤ○吾男兒  
ハ人形ヲ持テク



田中義廉 編輯

那珂通高 訂正

鞭と持てり、男鬼の遊ハ、女鬼と異ふと  
老たる北雞、鶩の子を、多く伴へり。○此鶩の子



皆水の中ニ飛入る。○此  
其性、水上ニ泳ぐことと、好めり  
○北雞ハ、其沈み溺まんと  
恐えて、甚憂ひ悲めり。○然れど  
も、鶩の子ハ、北雞の心を量り知  
らば、一ニ隨意ニ泳べり。○  
ハ、何を憂ひ悲むと、思ふや。○  
雞ハ、此鶩の、游水鳥なるを知ら

けし、我子と思ひ、悲めるなり

又、成長したる鶩は、  
嘴ハ、北雞の嘴より、大より、其  
足又蹠なり、故又、水又入りて、能  
く泳ぐことと、得らるなり



此ハ、何家あると知りや。○これハ、學校あり、  
ハ、數多の男女の子、此家ニ通ふを以て、知らるなり  
ハ、の法ハ、小鬼の遊歩場、出で、遊歩場、  
ハ、の數多の小鬼、出で、走らるなり  
ハ、ハ、或ハ、紙鳶を揚げ、或ハ、輪を廻せり、遊



の今急ぎで、學校へ行かん  
 と思ふふゆゑ、男兒は、女兒  
 と抱けて、走まりの此兒等ハ、  
 學校へ行くと、樂と思へりや  
 然り、此兒等ハ、其性善きも  
 のふせ、學校へ行きて、學問  
 することと、第一の樂と思ふなり  
 此馬ハ、柔和なる馬ゆゑ、二人の小兒と、乘せて、  
 歩きの此馬と、歩ると、思ふハ、此馬の前の一足  
 と、乗げしあとの一足と、下さんとすると、此馬ハ、



走るより、徐々歩  
 むゆりの前の小兒ハ、手  
 綱と、両手は、解きたまふ  
 も、其見ゆるハ、只右の手  
 のふせ、ゆりの前の小兒ハ、  
 馬より、落つること、恐  
 るゆゑ、ゆりの前の小兒を、  
 抱きて、をまゐる

此處ハ、工人の作事場ふりの、数多の大人ハ、作事  
 と、事とせりの二人の小兒ハ、此作事場へ、来りて、



来りて、遊び戯せ居り、一人の小兒、高く上  
 ぶ一人ハ、低く下ぶり  
 たり。汝ハ、小兒の傍に  
 あり、器と何ありと思ふ  
 や。○こまハ、斧と鋸あり  
 ○汝ハ、此小兒等と、善き  
 小兒と思ふ。○作事場  
 に、来りて遊ぶハ、善き小  
 兒といはれざるべし。○  
 今ハ、遊歩をば、時間と



ハ見えば、學問をば、時間あり。○學問をば、時  
 間に、作事場、来りて、遊び戯せ、作事の妨とせむ  
 ハ、必し。○ま小兒なり。○汝等ハ、遊歩のこまハ、作  
 事場、来るべし。○汝等ハ、遊歩場、来りて遊ぶべし。

第二

境

我等の、住居する世界ハ、平らなるもの。○地球  
 ハ、圓くして、球の如きものあり。故に世界ハ、地球  
 とり。○此世界の、静あるやうに覺ゆ。○地球  
 ハ、動くものなり。毎日一廻づ、旋りて一年ハ、  
 太陽の周りと、一旋りするものあり。○太陽の周

ものうて、世界に光と、  
熱とを興ふるものあり  
○我等、晝に、太陽を見ま  
ども、夜に、見ることあし  
○汝、夜の、太陽を見ること  
とを得ざるに、何ゆゑあ  
るぞ、知まらば、夜の、太  
陽の方へ、向えず、ゆゑ  
に、見ることを得ざるふ  
る○月も、亦、闇きものふ



まども、太陽、及、地球の如く、大なる月の原  
より、光あまきものあまども、太陽の光と、受け、始  
りて、輝くものあり  
我等一同、川場へ、出  
来り、川の、刈りた  
る、草の上へ、坐し居て、草  
と刈るを、観る。枯草の、  
柔ふる物あまき、此上の、  
遊び、戯る、宜しきあ  
りの草へ、牛馬の食あり、

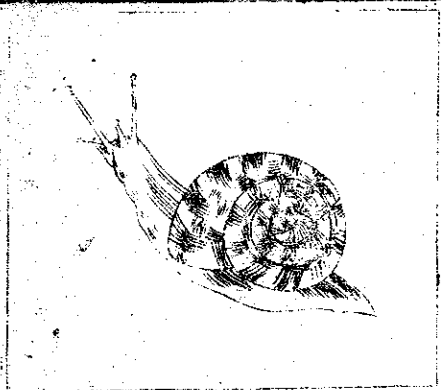


ゆゑ、牛馬を畜ふ家より、夏の間に、  
 せと貯ふ



狐の、犬に似たる、  
 頭平し、鼻と耳と、  
 尾の甚長し。此獸は、  
 穴の中に入り、晝の  
 間は、書い隠きて、  
 夜に入り、穴より出  
 て、田島の傍と遊行  
 けり、食と貪る獸  
 也。又好きて、桑  
 雞の雛を食ひ、

の實櫻の實等を食ふ。雞と捕ふまば、  
 穴を持ち、  
 行きて、とせと食ふもの、  
 犬と見るときは、  
 穴の中より逃げ入  
 り、出づることな  
 し。是は、穴に入  
 らざれば、直に、  
 犬に噛み殺さる  
 故あり。蝸牛  
 とつゝ、蟲は、  
 足なきゆゑ、  
 歩むこと能く、  
 只匍匐するもの  
 あり。



この蟲は、背の上  
 には、殻あり、  
 物に恐るゝこと  
 多し。其中、  
 蝸牛の、動く  
 ときは、四角  
 の角を出し、  
 其中、二本の  
 角を角

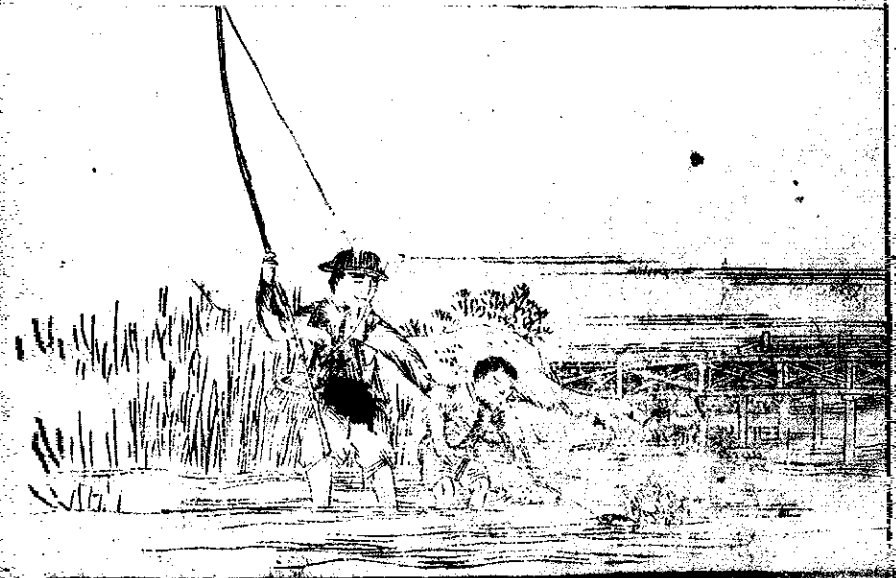


の先、目、短き角の下、口、  
 ハ、土の中、伏し、春の至る、待ちて、出、  
 汝先、此處、又、男兒と、女兒  
 と、驢馬の在ると見た、  
 ヤ、男兒ハ、驢馬、乗ら  
 ん、何如、汝、乗  
 り易かるべしと思ふ、  
 ○驢馬ハ、小さま、馬、  
 ども、小兒、乗、難  
 る、  
 遊の向ひ、荷車、  
 此荷車、



何ありと思ふや、遠き處、  
 と、能、  
 を載せたる、車、  
 此圖に、  
 と、二人、  
 人々、  
 ある、  
 て、  
 の、  
 と、

らとく○大人の脇又懸  
 けたるハ、何あるぞ○こ  
 まハ、蓋のつる籠りて、其  
 中ニ、魚を入るハ、あり○  
 此人の、立ちたる處ハ、深  
 ーと思ふハ、人の、膝ま  
 で、水ヲ入らざるを、見ま  
 ば、甚深うー、深ハ、深水  
 なるハ、二人とも、立つこ  
 と、能くざるべー○此河



二學したる梅は、汝ハ、此梅ハ、何ぞて造うたる  
 と思ふぞ○梅は、木と石と鐵との別ハ、何ぞ  
 も、木ハ、木に造りたる梅を、  
 汝ハ、此男衆ハ、何歳許な  
 りと思ふや○此男兒ハ、  
 十歳以上あり○此男兒  
 ハ、善き人ありと、思ふ  
 ○否、學問ともせず、又遊  
 歩ともなからず、休み  
 たりゆゑに、怠りものと、



梅は、木に造りたる梅を、  
 汝ハ、此男衆ハ、何歳許な  
 りと思ふや○此男兒ハ、  
 十歳以上あり○此男兒  
 ハ、善き人ありと、思ふ  
 ○否、學問ともせず、又遊  
 歩ともなからず、休み  
 たりゆゑに、怠りものと、



く、好み、舊古の時間来まひ、決り、命申し、  
び居ることなく、學校、くても、能く勉強、  
今、其等級、屢進むあり

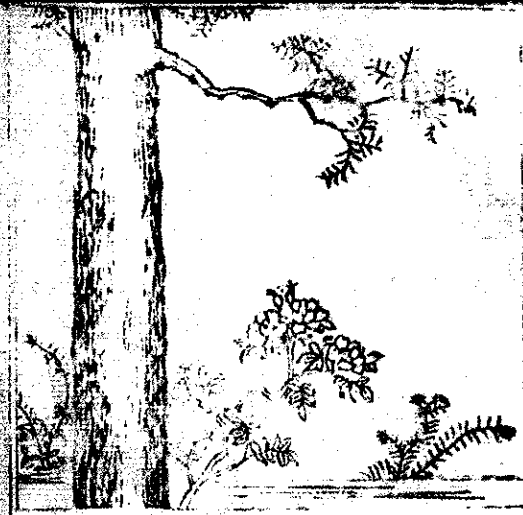
第三

雁の列とふして、行く間  
らうの見るべし、一羽の  
雁導とふせば、其他の雁  
は、こまは随ひて、飛行く  
よ。是も何處も行くや  
と或は、水邊も行き、華



の間、息み、或は田、下りて、食物を求めん、  
るあり、

此鳥は、冬は北より南に來り、春に至ると、又南  
より北に歸る、故に夏は此地に居ることあり



地は生ひ出づる物、  
木とけりて、木、  
木とけりて、草、  
年限り、  
灌木、  
と雖其幹、

ありの喬木といへ成長して高きものなり  
 云の此三の者と合せて植物と云ふ植物の生を  
 保ちて能く成長し又死して枯朽するものあり  
 ども人の如くは物と思ふ根は物を地より  
 吸ひ葉は能く呼吸をれども鳥獸の如く動く

ことふ  
 鳥の二つの足と二つの翼は  
 いて多くは空中を翔るは水  
 上に住むものもけり  
 の獸類  
 は四足よりして膚は長き毛は



りの此鳥と獸といへ身體を意に徙ひて動かさせと  
 も人の如く言ふこと能く  
 けり實のる草木の種類と知  
 て、豌豆と、蠶豆とと知り、穂の形を見て、稻と、麥と  
 と知るべし

草木より、昔種子けり、豌豆、  
 蠶豆、莢の中より在りて、梨、  
 李、橙、肉の中より在りて、種  
 子の、食物とあるものあり、種  
 麥、豆、粟の類あり、肉、骨、





物とあるものの、梅、桃、梨、李、蜜柑の類

草木の、皆種子より生じ、濕ひたる土の沖に、種子

と置くとき、漸く膨脹して、遂に破裂し、其所

へ芽と根とを生じ、あり

鹿は、山林に住する獸なり、

この獸の牡より、枝を生じ

たる角あり、牝より、角あり、

其色の、茶褐色にして、白き

斑あり

鹿は、長き足ありて、走るこ



と、甚速あり。○常く、草木の葉を食し、或は、田野

に來りて、穀物と、食することあり、此獸の角へ、堅

くして、器に造り、く、又其皮は、蓆とあるべし

此男兒は、惡しき心のものあり、汝はこの男兒の

持てる、帽の中に、ける物と、見たるか。○これハ、柿

の實あり。○此柿の實を、垣と踏えて、隣家より、盜

と取まるあり。○今此男兒、柿の實を、盜と取、垣

と踏えて、出でんとする所と、數多の犬と、咬

と見て、男兒を、追ひつけ、一匹の犬、男兒を、咬

へ、と、追ひて、男兒は、垣を、踏え去ることを得、



傾くことなく、其表面ハ必一様ニ平キものなり  
イ○汝ハ雞の、水ヲ飲むと、見レヤ雞ハ、牛馬ノ如  
ク、首と下げて、飲むこと能はず、ゆゑニ一滴も  
入まば、首と擧げて、咽ミ、飲み下すあり

此處ハ、何如ある所ありヤ○此處ハ、穀倉の傍  
るべし、雞ハ、巢に、上らん  
し、梯子と、傳ひ行くあり  
○梯子に、横木あり、こゝハ  
何ありヤ、此横木ハ、梯子の

綱あり



汝ハ、雞の巢を、見たるか○巢ハ、隠れて、櫓の裏  
に、あるゆゑ、見ることを得ず

汝、此處に來て、汝、昨日、失ひたる所の、書籍を、尋ね  
得たりヤ○否、未、尋ね得ず○汝ハ、文庫の中を、搜  
し見レヤ○幾度も、搜し見たまども、其處より、  
汝○汝、今、一度、尋ね見よ、書籍ふけまば、尋ね  
能はず

又、汝ハ、筆、何なりヤ○筆ハ、命ぜりまたり  
の上ニ、置きたり○汝ハ、筆の用ぬ、を、  
ヤ○否、未、用ゐるか、たを、知らず○汝、今、其筆を取、

言、汝又、筆の用ゐる方々、教ふべし、筆の用ゐる方々  
 知らざれば、字と習ふこと能はず  
 汝は、今日、學校へ行きたりや  
 の學校へ行きて、終日學びて、先  
 刻、歸り来たり。然らば、座を  
 就きて、復讀せよ、凡て、學びた  
 る所を、常々復讀して、決  
 て、忘るべし。

第四

岸の上へ、二人の少年ありて、三艘の船の岸に着



くと、見居たり。三艘共帆を、十分に張り、櫓  
 の上へ、旗を揚げたる、船を  
 一人の少年云ふ、我が朋友  
 は、去年、先の船に乗じて、外  
 國へ、往きたりしが、日を數  
 ふまば、其出立せし日より、  
 今日まで、殆一年又及びて、  
 歸り来たり  
 彼の両親も、日々、彼の歸る



と待てり○今日無事ある顔と見ることも得て  
何許か喜ばうんまた彼男も父母の恙なき  
顔と見れば定めて大に喜ぶべし  
彼船は堅固なる船にて風雨に逢ふとも破損な  
く無難に歸り来まば船中の人々皆此船と忝  
く思ふあらべし

人々の外國に行くは學問或は貿易をふして我  
國の利益をふせんことと欲まらざるゆゑあり  
總て鳥も嘴の長きものと短きものとあり○此  
嘴は食物を啄む○鳥は穀物と食するもの



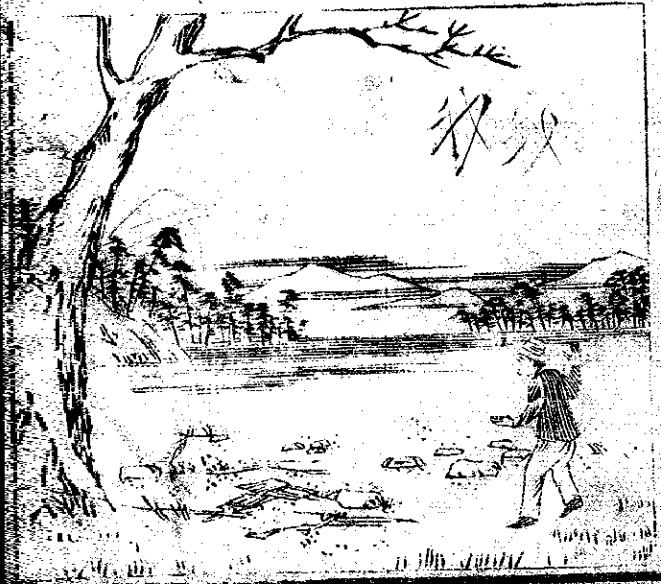
と、魚又ハ、蟲を食するものと  
あり○鳥の目ハ、面の両側  
にあり、一時ハ、両方を見る  
ことと得るあり○林中に遊  
ぶ鳥と、林禽とつゝ、水上に遊  
ぶ鳥と、水禽とつゝ○鳥の足  
は、四指あり、前二指は、

指ハ、後二指アリ、然れども、啄木鳥類も、前二指  
ありて、能く大木に上下し、樹皮の中を、ほら蟲  
を捜し食ひ



古我誤

此人ハ驚きたる風情なり、是ハ何故多クヤ、何故あることと知られ、此人久しき以前、遠方ニ行きて今、郷ニ歸り來るに昔住みたり、家の變りたるを見て、驚けるあり、さて此家の斯く變りたる所以を、詰問せんべし。



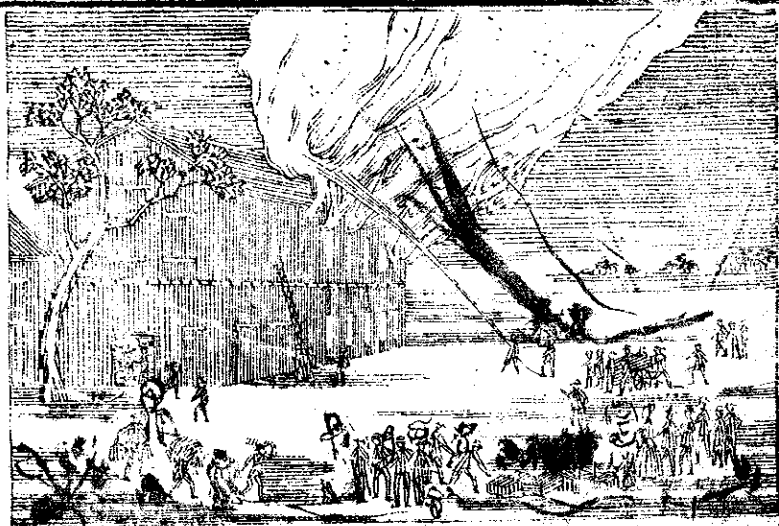
一ツ、小兒ハ至りて、忘るるもの如く、紙と燒きて遊べる、其火、忽家の障子ニ燃えつき、然り此家士で、燒け失せたり。今此人、我家ニ歸り來りて、未、妻子の行きたる所を、知ること能く、悲み歎くあり。今此人の家の、燒けたる時の状を、又、家ニ懸けたる、梯子の、消さんと、水と注げり。

境況



隨ひ、徐々歩めり、此小兒ハ、今牧場ニ、牛と曳き行  
 く所あり、○此小兒ハ、何ゆゑニ、歩みあり、書と  
 讀むや、此小兒ハ、其性極めて賢く、常ニ學問を

こゝと好めども、家貧しき  
 ゆゑ、學校に入ること能  
 ざり、然るに、日々牧場へ行  
 き、因りて、道を行く  
 書と讀むあり、又、牧場  
 して、休む間、書と



然るに、火酒消え、  
 家終に焼け盡ち、  
 家の入々、  
 きるあり、  
 さきバ、小兒ハ、火と弄ぶ  
 一度過つ時、家と  
 も、倉とも失ひ、  
 其身とも失ふこと  
 あり、  
 此小兒ハ、

此圖、雨をたると、  
 此小兒ハ、

ることなし。○此の如き小兒ハ他日必人さま  
りて、貴き人とあらべし

悪しき小兒ハ、日々學校へ行くと雖、能く勉強  
せしむ遊ぶことのみと、好打ゆえ、後ハ愚者  
者とありて、貧賤ニ其身を終るべし。

雲雀、巢々、麥畠の間ニ造りて、雛を育てたり。○麥  
ハ、己ニ熟して、刈るべき時ニ至りたるニ、雛ハ未

自由ニ飛ぶこと能はず。一日、親鳥、食を求めんと  
て、飛び去り、暮ニ及びて、歸り来まハ、雛告げて今

日、此鳥主なる農夫、其子と共に来りて、明日ハ、近

隣の人と雇ひて、此麥を刈り取らんとて、歸まり

と云ふ。親鳥聞きて、彼、近隣の人と雇はんとあら

ば、求急ニハ、刈取るべし。

但、明日ハ、此處より行くとモ、  
恐ろしく足らぬといひ、其

翌日も、亦食を求めんとて、  
飛び去りたり

かくて、日の暮るし比、親鳥  
歸り来まハ、雛又告げて、今  
日も、農夫、其子と共に来りて、近隣の人と雇は



近隣の人と雇は

く己が作りたる、麥と刈るに、暇なれば、明日  
ハ、朋友親族を頼りて、刈り取らんとして、歸せり  
云ふ親鳥ハ、彼向他人と頼むの心なれば、明日も  
憂ふる足らぬと云へり

さて其翌日、親鳥例の如く、飛去りて、歸り来り、  
雛の云ふ、今日ハ、農夫父子来りて、かく麥の熟せ  
るうへハ、最早他人の力と、待つは暇なれば、明日  
ハ、自刈り取りて、歸せりと云へり

親鳥ハ、こゝと聞きて然らば我等も、疾く此處を  
立ち去るべし、農夫が、自刈り取らんと、決りたる

うへハ、必日と延まれば、うへとへりてぞ、

親鳥の言、實又理なり、他人に依りて、事を成さんと  
する者ハ、恐るる足らざれども、自為さん  
決する時ハ、須臾も猶豫せざるべし、けしきあはさ  
まば、人々、皆自為さんことを志し、他人の力を  
頼むべし

第五

今花園に、善き種子を、蒔きて、善き植物を生  
め、美しき花と、開くらんことを、園中に、雑草  
の雑草を、抜き取り、ざることを、善き種子を、種

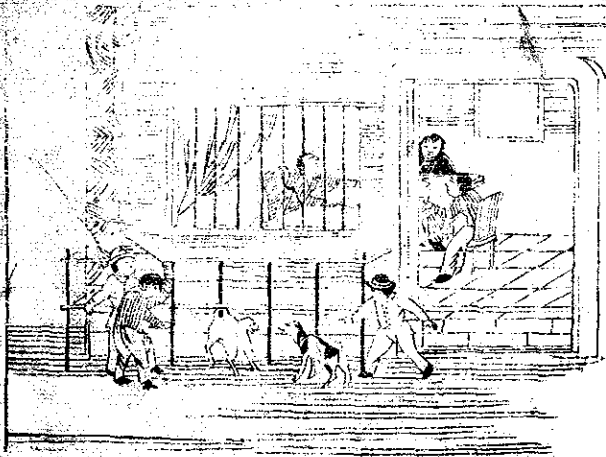




さ去ることや、怠りて成長せしむるも、終に  
 中々萌せる良心を害すことなきを期す。盡以  
 至るべし  
 汝等、善き人とあはれんことを欲せば、此人の雑草  
 を抜き去るが如く、勉めて不正の心と抜き去る  
 べし  
 爰は圓き器と四角ある器とを、入  
 またる水取り、水と水は、同トけま  
 ども、其器の形より、或圓く、或  
 四角ある形とをさす



人も、小児の時、此水の如く、善き友と交りて、善  
 きことと見聞けば、善き人とあり、又、惡しき友と  
 交りて、惡しきことと見聞けば、惡しき人と



かるあり  
 家の内外、數多の小児は、  
 て、其遊ぶべきの各異ありと  
 見るべし、家の内なる小児は、  
 日々學校にて、學ぶた  
 家は歸りて、其友とを  
 して、こまじと樂とれ此等

日、必賢き人とふるべし、又外に集まらば遊ばざる小  
児、學校にも行かざる者と見え、犬を踏む合  
せ、膝を打揮り、無益の遊のいとふせり、此等ハ後  
日、必愚なるものとふるべし、汝等、賢き人とな  
んと思え、能くご用かて、常は善き友と交り、  
必惡しき小兒等と遊ぶべし、  
汝等、事の正しうござると知るときハ、たとひ他  
日、利あることハ、思ふとも、決して行ふべし、  
又惡しき業セバ假にも、心又、行かんことと思ふ  
べし、  
善心は行かんことと思ふときハ、縦令

事には出ずべし、既に行ひたるは、同トと知る  
べし、  
凡て惡事ハ、虚言より始まるものあり、さまハ、誓  
其身に利益ありとも、決して、虚言いづらん、虚  
言を以て、得たり利益ハ、他人の物と、盗みたりと、  
同トく、終るハ、其身の害とふるべし、  
むら、一人の男兒あり、毎ハ、狼来たり、狼来ま  
り、誰か出で、救ひ給へと大ハ、呼びて、途に走ま  
り、こまハ、真ハ、狼の来たり、  
来りて、救をんとせると、欺き得たりとて、大

其人と笑ふと以て、戯とまゐるあり、  
 度々あり、一ヶある日、眞は、狼米、  
 て、此男兎と食ふんと、  
 男兎は、大に呼びて、狼米  
 きり、救い給へといへど  
 も、誰も亦例の虚言ふる  
 べしとて、こまを、救ふも  
 のふ、うりしゆえ、終は、狼  
 のため、噓み殺された  
 り、故に、平生、戯も、虚言



と以て、人と欺くもの、適、眞實のこと、  
 も、信とあはれもの、  
 此處と、何如ある家ありと  
 思ふ、その〇と、  
 爰に、三人の男、  
 きたる、二人の者、  
 買えん、  
 の書と、購ひ得て、去らんと



以一人を、机上の書の價と定め居るあり  
 今此二人の書籍を買ふに、何の爲ありや、家  
 有りて、之を理會し己の智識を増さんとなれ  
 あり、書ふけしむべ、智識を増しこと能く、  
 故に志は、さとき、國の利益と、興にこと能く、  
 故に志は、る者、有用の書と、金を惜ま  
 ぬあり

此圖の男、手し持てる、書と讀みて、其義を、  
 小兒に語り聞しむる、亦あり。○汝、この小兒、  
 能く心を用めて、其話を、聞くと、思ふ。○此小兒、  
 心



と用かて、其話を、聞くと、思ふ。○  
 此男の、語ることに、深  
 なるさまあり、思ふ。○今聞  
 けり、此書の中の、む  
 箇條なるべし。○凡そ教  
 を受る者、決して、倦  
 怠の心、生じぬ。○  
 倦怠の心

其顔色を見、  
 不考者も、亦こ  
 し、それ、教と  
 受る者、皆此小  
 兒を、如く、心

めて其話と能く考ふべきことなり

第六

汝ハ、猫の兒と愛れるヲ、又、犬の兒と愛れるヲ。我ハ、猫ととも、犬ととも、其遊あそび戯あそぶ所と見ることと好あむ

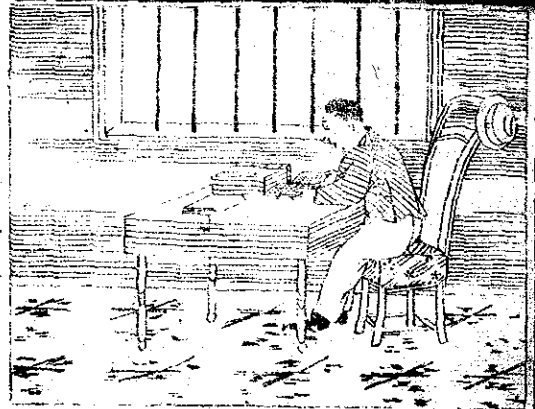
總て、獸類も、稚き時ハ、小兒の如く、遊あそび戯あそぶことと好あむものあり、中には、猫の兒ハ、繩いと又ハ、鞠まりを弄あびて能く戯あそぶ遊あそぶなり。○然しかもども、



獸類も、年老おきなまば、遊あそび戯あそぶことと好あまむ人ひとも、年長おきなけたり後のちまで、遊あそび戯あそぶ所ところハ、耻はづべきこととよりいぢや、○さままば、老おきなたる猫ねこを、其兒この、戯あそぶと見ることと好あむども、其身みに觸ふることとを、喜あむることと好あむども、其身み又、觸ふることとを、喜あむるものゆゑ、小兒こハ、遊あそび戯あそぶことと老おきな人の身み又、觸ふることとを、其椅子いす、礼れいふと又ハ、決けつて、手てを弄あぶ

此小兒ハ、學校がくにて、善よくあそぶ能べきことなり。○汝ハ、此この





の學校より書と讀むに  
りや○此頃始めて、之を聞  
たり

此小兒ハ、何の書と讀むや○  
彼ハ、小學讀本と讀む○其讀  
む所の、小學讀本ハ、何の卷あり  
や○彼ハ、卷の三と讀む、我ハ、この小兒の如く、  
能く書と讀むもの、好む、能く書と讀むものハ  
後ハ、善き人と、まじりあり○若學問もよく、智  
慧もよく、ハ、いかで、善き人と、まじり、得べ

き善き人と、まじり、ことを得れば、他人と愛せし  
む、ことよく、又、貴ばむ、ことよく

爰ハ、三人の小兒あり、一人  
ハ、机に向ひて、書と讀み、二  
人の、搦棒を廻り、遊べ  
る、獨樂を廻り、跳り旋  
る、ゆゑ、机は觸れて、其上  
の、筆筒を倒せり、書と讀ま  
居たり、小兒の心ハ、此二  
人の、戯と遊ぶ、何如と



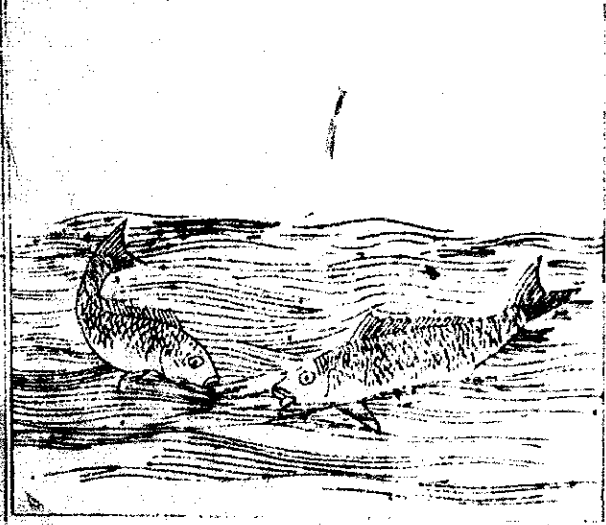
ぶく思ひ居るあしん、定めて此小兜等の他處  
 へ行らんことを願ふあるべし  
 總て人の自好まざることをば、人も亦好まざり  
 ものと思ひ、遊び戯るにも、決して人の妨とあ  
 るべきことを、あはれべし、又自好むこと、人  
 も亦好むものと知りて、それをまづ人は譲るべ  
 し、さきば、古き教へも、己の欲せざる所、人は  
 施ることあはれといひ、又己達せんと欲せば、人  
 と達せしめよとも云へし  
 爰は遊歩に出でんと候る、小兜は、此小



兜の善きと悪しきと、知  
 まりや、我ハ、木、其人とふ  
 りて、知らば、雖今遊歩に  
 出でんとするに、其母は、呼  
 び返され、速に歸り來り、  
 否む色なき、見まは、善  
 きの家なり、其母は、  
 呼び返され、必まて、厭ふ心の、色見、  
 必善きもの、まらば、知るべし  
 此小兜ハ、未學校に入らざるか、此小兜ハ、

歳、過きばと見ゆまハ、未、學校、入らざる  
 一、我ハ、此小兒の、學校、入りて、遊歩の、好  
 まば、一々、効ウテ、書と讀み、成長の、後、其善き人  
 たると、失ハ、ぎ、ん、ことと、願ふ、あり  
 此圖、画けるハ、何物、ありヤ、〇、こまハ、魚、あり  
 汝ハ、生きたる魚也、見たり、べし、〇、常、これを見  
 汝ハ、漁セ、こと、らる、べし、何と、以て、漁セ、ヤ、〇  
 釣、糸と、以て、魚、釣、こと、らり  
 魚ハ、水中、に住むもの、ゆゑ、水、を、離、し、ときハ

其命と保つこと能くハ、〇、魚、ハ、鱗と、尾、らりて、  
 自由、水中、と、游泳、し、又、全身、鱗、あり、鱗、ハ、  
 まり、其、鱗、ハ、魚、より、て、大小、と、異、り、せり



汝ハ、魚の、水中、に、らる、とき  
 〇、其、目ハ、よく、物、を、見、る、と、  
 思ふ、〇、然、レ、水中、に、らる、とき、  
 よく、物、を、見、る、を、ら、り、〇、何、と、  
 以て、水中、に、らる、能く、物、を、  
 見、る、こと、と、知、り、ら、り、ヤ、  
 一、水中、に、らる、物、を、見、る、こと

能いざる時ハ必若石ニ衝き當りて物ヲ傷くニ  
 然らざるものもよく物を見ることと得せり  
 人ハ水中ニ入て物を見るごと、分明なり魚ハ水  
 中ニても甚分明なり、  
 とき魚の水中ニても能く物を見るハ其目人と同  
 ト、然らざればあり、  
 魚ハ水中ニ住み人ハ空氣中に住むゆゑ人の  
 空氣中ニても能く物を見るハ魚の水中ニても能く  
 物を見るニ同じ

今この男兒ハ家ヲ辭して遠行せんとし戸前の  
 階ヲ降りたるゆゑ其妹ハ階ヲ降りてこれを送  
 り別ニ臨みて互ニ言と贈  
 合はる所あり

兄曰汝慎しく家ヲ守り能  
 く其身ヲ保つべし火と過  
 つことありれ病と生むる  
 ことなるまとの妹ハ吾カ兄  
 寒暑と犯まべし又久



く他郷に止まるべし

兄又云ふ予、彼郷に到らば、速く書きて以て安否を  
報ぐべし、汝も亦其安否を報せよ、予は他郷に在  
る間、只汝の消息を得ると以て樂と爲すべし  
のみ  
汝等、此二人を何如するものと思ふや、此れを  
同胞の孤あり、孤とて幼稚のとき、兩親を喪ひ  
たるものなり、  
此二人早く、兩親を喪ひたるゆゑ、今自、身を立て  
んとし、けりあり、  
今、この男子は、遠方へ行きて、幾年、妹と相見ると

と心得、此の文字と知るゆゑ、書簡と  
贈答し、其安否を審み、けり、と心得、  
も、此二人、文字と知り、けり、何と因りて、音信  
と、通ひることと心得、  
汝等、此二人の事を見て、能く文字と習ひ、勉めて、  
書簡と作ることを、學ぶべきなり、  
むら、この家、兄弟の小兒あり、兄は七歳に、  
て、弟は五歳なり、○兄は、其才、最敏に、心も、亦  
優、し、ものあり、弟も、良き性質あり、とも、尚、幼  
ゆゑ、末世間の事と知り、輒も、世を過すべから

巢動てあはことり

ある日、兄弟とも、郊外へ出でて遊ぼうと、おる家の、雛と、小鳥の巢へ、親鳥の、人の来ると、驚き



て、飛びよりたり、兄弟は、巢の中へ、窺ひ見るに、雛三羽あり、弟は、悦びて、雛と取りて、持ち歸らんとり、いと、兄は、これを止め、親鳥の子と愛れども、父世の、我等と、愛し給ふ、同一、今世、この雛と、取り去らば

親鳥の悲何如あらん、若我家へ入り来りて我等兄弟を、捕へ去るものぢらば、父母の悲を給ふこと、幾あらん、まいてや、雛を親鳥の、養ふ由りて、生長けりものに、今、人の手にかゝりなば、決して、育つこと、たゞ、うづらぐ、されば、今、この雛と、取り去らざること、よけまじ、論じけむ、弟も、其理を、服して、兄の教を、随ひたり

此弟の、鳥の雛と、取らんとけり、ハ、殺生せむに、非まども、其理と、論を、わむ、かくの如し、は、益、殺生を、つとや

大蔵經 卷之六 大品 第六





太田秀敬翻刻

前川善兵衛發兌

東京第四區三小島三川橋通源齋書肆

發賣下并天區日...

筑前福岡實千門

林 齊 助

向 播多中島町

船 木 浦 助

筑後久留米本屋

菊 竹 儀 貞 清

弘 通

書 肆